

# 近江商人高井作右衛門家の経営（1）

The Management System of the Takai Family of Omi Merchants (1)

上 村 雅 洋  
Uemura, Masahiro

## ABSTRACT

The Takai family was a family of Omi merchants who created Matsuoyamamura in the Omi headquarters. During the Edo period the Takai family established a store in Fujioka, a town in the Kanto district, and engaged in brewing. This paper aims to shed light on the management system used by the Takai family. This is compared to the system used by an Omi merchant engaged solely in trade.

## はじめに

日野商人<sup>(1)</sup>は、近江商人の中でも八幡商人や五個荘商人とは異なり、酒造業などの製造部門を包摂した近江商人である。その中でも高井作右衛門家は、関東に酒造業を展開した著名な日野商人として知られている。高井作右衛門については、『近江商人事績写真帖』<sup>(2)</sup>掲載の嘉永3年（1850）の「日溪持丸鑑」（勸進元中井源左衛門、行司正野玄三）に大関として門坂善太郎とともにその名前が見え<sup>(3)</sup>、有力な日野商人の一人とされてきた。高井作右衛門家については、すでに同家の家史的性格をもつ島武史氏の『高井作右衛門年代記』<sup>(4)</sup>によって、その概要および歴代当主を中心としたさまざまな事柄が、史料とともに熱く語られている。また、『近江蒲生郡志』『近江日野町志』『群馬県史』『藤岡町史』『藤岡市史』など関連の自治体史などでも、高井作右衛門家について多くの史料が紹介され、その事業経営について触れられている。

本稿では、これらの高井作右衛門に関する研究を踏まえ、現在までに明らか

- ✓ (1) 日野商人については、拙著『近江日野商人の経営史的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究）（C））研究成果報告書、2006年）、駒井正一『日野商人—隠れたる北関東での謎—』（同、2001年）、江頭恒治『近江商人中井家の研究』（雄山閣、1965年）、末永國紀『近代近江商人経営史論』（有斐閣、1997年）、拙著『近江商人の経営史』（清文堂出版、2000年）、松元宏編『近江日野商人の研究—山中兵右衛門家の経営と事業—』（日本経済評論社、2010年）などを参照。個別の商家については、最近10年間では次のような研究が続々と進められ、その実態が明らかになってきている。正野玄三家については、本村希代「近江商人の創業期の軌跡—初代正野玄三の場合—」（同志社大学『経済学論叢』第54巻第4号、2003年）、同「近江商人正野玄三家の合業流通」（『経営史学』第39巻第3号、2004年）、同「明治期における近江商人の企業家活動—正野玄三家の事例—」（『企業家研究』第2号、2005年）、同「近代における近江日野売菓の展開と近江商人正野玄三家」（『福岡大学商学論叢』第53巻第2号、2008年）、拙稿「近江商人正野玄三家の事業と奉公人」（徳永俊光・本多三郎編『経済史再考』思文閣出版、2003年）、同「近江商人正野玄三家の奉公人と給金」（『大阪大学経済学』第54巻第3号、2004年）、同「明治期における近江商人正野玄三家の家則と店則」（滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』第39号、2006年）、同「近代における近江商人正野玄三家の雇用形態」（和歌山大学『経済理論』第332号、2006年）の研究がある。吉村儀兵衛家については、拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」（安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の歴史と社会』清文堂出版、2009年）、同「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態」（1）（2）（『経済理論』第353号、第354号、2010年）、同「近江商人吉村儀兵衛家の経営—本店を中心に—」（和歌山大学『研究年報』第14号、2010年）、同「近江商人吉村儀兵衛家の出店経営」（『経済理論』第357号、2010年）の研究がある。山中兵右衛門家については、前掲書以外に、鈴木敦子「近江日野商人山中兵右衛門家の出店経営—小田原店を中心に—」（『大阪大学経済学』第58巻第1号、2008年）の研究があり、島崎泉司家については、鈴木敦子「近江日野商人島崎泉司家の経営—近世期における茂木本店を中心に—」（『大阪大学経済学』第59巻第2号、2009年）などの研究がある。また、関東における日野商人の系譜をもつ酒造業者については、青木隆治『近代酒造業の地域的展開』（吉川弘文館、2003年）の研究がある。
- ✓ (2) 滋賀県経済協会編『近江商人事績写真帖』（同、1930年）、第111図。
- ✓ (3) 『近江日野町志』巻中（滋賀県日野町教育会、1930年、435頁）にも、ほぼ同様の「日溪持丸鑑」が掲載されており、そこでは関脇に山中兵右衛門とともにその名前がある。
- ✓ (4) 島武史『高井作右衛門年代記』（高井株式会社、1992年）。
- ✓ (5) 『近江蒲生郡志』巻五（滋賀県蒲生郡役所、1922年）、『近江日野町志』巻中（滋賀県日野町教育会、1930年）、群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編9 近世1（群馬県、1977年）、藤岡町史編纂委員会編『藤岡町史』（藤岡市、1957年）、藤岡市史編さん委員会編『藤岡市史』通史編 近世 近代・現代（藤岡市、1997年）、同資料編 近世（藤岡市、1990年）、同資料編 近代・現代（藤岡市、1994年）、群馬県酒造組合・群馬県酒造協同組合編『群馬県酒造誌』（同、1998年）などがある。

表 1 高井作右衛門家の歴代当主

代	名 前	没 年	法 名	備 考
初代	六左衛門	正徳 2 年 (1712) 2 月 6 日	陽雲淨和信士	高井家の始祖
2 代	多左衛門	宝暦 4 年 (1754) 正月 23 日	善岩慈忍信士	初代の男子
3 代	作右衛門	宝暦 9 年 (1759) 4 月 18 日	権大僧都宝善了岸淨歸居士	開店第 1 世, 2 代の長男
4 代	善左衛門	宝暦 14 年 (1764) 6 月 17 日	宗源淨旨居士	2 代の男子
5 代	作右衛門厚忠	寛政 9 年 (1797) 正月 13 日	性山淨沢歸西真空居士	開店第 2 世, 4 代の男子
6 代	作右衛門昌敷	文化 13 年 (1816) 10 月 14 日	悟山徹道広寿真松居士	開店第 3 世, 蒲生郡川合村森島吉
7 代	作右衛門忠玖	安政 6 年 (1859) 10 月 26 日	大雄寿峰松年一如真寄居士	開店第 4 世, 6 代の長男
8 代	作右衛門昌封	嘉永 7 年 (1854) 8 月 4 日	寿山真慶円雄益智良覚居士	開店第 5 世
9 代	作右衛門昌苗	明治 27 年 (1894) 10 月 27 日	仁山弘義益信通雄居士	開店第 6 世, 蒲生郡清田村藤澤茂 右衛門三男, 津店高崎店開設
10 代	作右衛門昌言	大正 2 年 (1913) 12 月 20 日	松雪通操愛蓮円齊居士	開店第 7 世, 8 代の次男

(注)『近江日野町志』巻中(滋賀県日野町教育会, 1930 年), 593 頁より作成。

になった同家の史料に基づいて, その経営内容についてできる限り分析を進め, 創業期から近代に至るまでの同家の発展過程とその要因を明らかにすることで, 製造業を包摂した近江商人の在り方を考えてみたい。

まず, 高井作右衛門家の概要について, 歴代の当主の動向とともに簡単に触れてみることにしよう。高井作右衛門家は、『近江日野町志』<sup>(6)</sup>によれば, 祖先は高井五郎重実とされ, その子孫である作五が近江国蒲生郡松尾山村に帰農して一家をなした。この作五は万治 3 年 (1660) 2 月 2 日に没した。作五の子供は六左衛門であり, これが表 1 に見る高井家の初代となる。六左衛門の子供が多左衛門であり, その長男が作右衛門であった。

作右衛門は, 元禄 12 年 (1700) に生まれ, 享保元年 (1716) 18 歳の時に, 近江国で麻布を仕入れ, 関東の武蔵国・上野国で行商を開始した。近江商人としての高井作右衛門の出発である。その後 20 年近く関東での行商を続け, 富を蓄積し, 元文元年 (1736) 38 歳で, 上野国緑野郡藤岡に店舗を設けた。近江商人によく見られる行商から店舗商業への転換であり, 開店 1 世の誕生となる。藤岡の店では, まず酒造業を営み, 元文 4 年には質屋も開業するようになり, 関東での経営基盤を作りあげた。彼は宝暦 9 年 (1759) に 61 歳で亡くなるまで, 高井作右衛門家の創業に努めた。

開店 2 世の作右衛門厚忠は, 父の事業を継いだ, 子供がいなかったので近

(6) 前掲『近江日野町志』巻中, 588～592 頁。

江国蒲生郡川合村の森島吉兵衛の男子を養子として迎え、開店3世とした。開店4世は、3世の長男作右衛門忠玖が継いだ。5世の作右衛門昌封は、4世の長男として享和2年(1802)に生まれ、文政10年(1827)に家督を継いだ。<sup>(7)</sup>

6世の作右衛門昌苗は、近江国蒲生郡清田村の藤澤茂右衛門の三男として文政13年に生まれ、5世作右衛門昌封の娘えみの婿養子となり、高井家を継いだ。<sup>(8)</sup> 6世は明治27年に65歳で亡くなるが、その間に高井作右衛門家の事業拡大に貢献した。慶応元年(1865)には伊勢国津の余慶町に出店を設けて、酒造業を営んだ。明治元年(1868)には津の九江町に支店を置き、同4年には醤油醸造業を兼業した。さらに、同年には上野国高崎町に支店を開設し、醤油醸造と酒類販売業を始め、業務の拡大をはかった。

7世作右衛門昌言は、嘉永3年6月に5世の次男として京都で生まれ、明治8年に38歳で家督を相続した。<sup>(9)</sup> 8世作右衛門了一は、7世の長男で、明治43年11月に家督を譲り受けた。10世は、9世の長男として昭和15年11月19日に生まれた。<sup>(10)</sup>

## I 江戸時代の経営

### 1 酒造業

高井作右衛門が、関東で酒造業を開始し、藤岡に店を設けた状況については、「高井家五世ハ只今より貳百五拾壱年前享保十一年郷里江州を出で、関東の藤岡町へ支店の開業を志を立つ、時に廿八才、享保十四年ニ至り、酒造業を開始すべく決意なり、七年後の元文元年開店以来二四一年今日の隆盛を見る」<sup>(11)</sup>、「享保十四己酉年より酒造相始め、七年間へて、元文元丙辰年より開業」<sup>(12)</sup>とある。すなわち、享保11年に近江国から関東へ行商を始め、同14年に酒造業を開始し、元文元年に藤岡店を開店したとあり、前述した『近江日野町志』の記述と

(7) 前掲島武史『高井作右衛門年代記』86頁。

(8) 同上、126頁。

(9) 同上、165～166頁。『近江日野町志』巻下(滋賀県日野町教育会、1930年)769～779頁。

(10) 前掲島武史『高井作右衛門年代記』209頁。

は少し異なる。また、文化4年(1807)8月の「店法」<sup>(13)</sup>によれば「享保十四年西ヨリ開業、一清酒醸造、附帶 銘酒」とあり、当時の史料が現存しないので明確ではないが、一応次のようなことが言えよう。

高井作右衛門は、享保期に近江国から出て、関東で麻布など行商を始め、行商活動の中で藤岡という地が自らの事業活動に適した地であることを確信し、享保14年にそこで酒造業を開始した。元文元年には店舗を設け、本格的な事業展開を行ったようである。藤岡は、背後に養蚕地を控え、中山道の脇往還にあたる交通の要衝地であり、絹の集散地となっていた。そこでは、定期的な絹市が開かれ、絹宿も多数存在し、近郷からはもちろん江戸・大坂・京都からも呉服商などが集まり、大いに賑わっていた。<sup>(14)</sup>

明和7年(1770)6月の藤岡町の「銘細帳」<sup>(15)</sup>によれば、藤岡町は高853石8升9合、百姓家数666軒、人数2721人(男1438人、女1283人)で、「一蚕 壹ヶ年ニ付、絹八百五拾疋程、真綿拾五貫目程」「一男稼、耕作之外絹、真綿、煙草、其外品々売買仕候」「一女稼、きぬ真綿仕候」とあり、また「一当町市場 壹ヶ月ニ貳式度 朔日、四日、六日、九日、十一日、十四日、十六日、十九日、廿一

✓ (11) 文政8年正月「高井家記録写(一)」(高井作右衛門家文書、以下特記しない限り引用史料は、すべて同文書による)。この史料の末尾には、これを編纂されたと思われる昭和52年6月の市川勝氏の署名がある。同史料の表紙には、「文政八乙酉年正月、昭和卅一丙申年極月」とある。

✓ (12) 文政8年正月「記録之写(二)」の史料の表紙には、「文政八乙酉年正月始、記録之写(二)主に金銭出入を記す」とある。

(13) 文化4年8月「店法」。この史料は、表紙に「文化四年八月、明治四年正月」と記されており、冒頭部分には文化4年8月の「身分定事」が写され、清酒醸造(享保14年)、質物取(元文4年)、醤油造(明治4年)、荒物類(明治4年)の開業年が羅列されている。その後に「当店在来ノ仕法ヲ折衷シ、今回店則創定候ニ付、確守遵守致スベキ事」として、「明治十年一月」の「店人雑則」「諸帳場ノ雑則」が記され、続いて明治12年からの改正事項、改正店法が昭和15年まで書き留められ、最後に「高崎支店分」として、明治期の店則とその改正が付されている。この史料の最初から4分の1程度の部分は、前掲『藤岡市史』資料編 近代・現代、643～647頁に掲載されている。

(14) 前掲『藤岡市史』通史編 近世 近代・現代の第4章産業の発達と交通を参照。

(15) 明和7年6月「銘細帳」(前掲『群馬県史』資料編9 近世1、300～307頁)。

日、廿四日、廿六日、廿九日、絹綿たばこ売買仕候」とあるように、定期市が開催され、人の出入りが盛んな町場であったことがわかる。このような発展を遂げる地に目をつけて、高井家は店舗を構えたのである。

高井作右衛門が藤岡で酒造業を開始した経緯については、行商の過程で藤岡の笛木町にある水沼家に出入りするようになり、この水沼家を拠点に周辺地域への行商に励んだとされている。そして、この水沼家によってその向いにある星野兵四郎家が紹介され、星野家の所有する敷地を借り受けて、笛木通りに面して間口14間、<sup>(16)</sup>奥行40間の地に酒蔵を設けた店舗を開設したという。<sup>(17)</sup>

高井作右衛門家の酒造業に関して、具体的な状況が明らかになるのは、寛政4年(1792)閏2月の「酒造御改之写」<sup>(18)</sup>である。そこには十一屋作右衛門として「株高百五拾石之内」「当時造高五拾石」とあり、惣桶数106本(6尺桶32本、5尺13本、4尺5寸3本、4尺28本、3尺30本)が掲載されている。そのうち5尺桶13本(うち焼酎入2本)と6尺桶3本が当時仕込みに用いられ、残りは空桶であるとし、150石の株高であったことがわかる。この時に藤岡町の他の6軒の酒造株高と酒桶も書上げられているが、大坂屋市右衛門は株高70石・惣桶数68本、枡屋利兵衛は株高100石・惣桶数47本、半兵衛は株高50石・惣桶数27本、源左衛門は株高50石・惣桶数8本、忠左衛門は株高50石・惣桶数12本、半七は株高50石・惣桶数15本であり、高井家が当時藤岡町の酒屋の中では最も大きな醸造高を誇っていたことがわかる。

(16) この数値は、後の屋敷の大きさを考えても大き過ぎるように思われる。

(17) 前掲島武史『高井作右衛門年代記』57～58頁。前掲の「銘細帳」には酒屋として兵四郎が「百八拾石 寛文五乙巳年改、五石六斗貳升五合 天和元酉年改、百貳十八石 元禄十丁丑年改」として記されており、星野兵四郎家が元来行っていた酒造蔵を借りて酒造業を始めた可能性が高い。星野家は、藤岡町の有力商人であり、星野兵四郎家は大坂の戎屋の絹宿であった(56頁)。星野家については、前掲『藤岡町史』474～482頁参照。

(18) 寛政4年閏2月「酒造御改之写」。この史料は、前掲『群馬県史』資料編9(548～551頁)と前掲『藤岡市史』資料編 近世、752～755頁に掲載されているが、史料が一部欠落して翻刻されている。

(19) 店名前を十一屋作右衛門としている。

文政8年にも酒造道具として、酒船1艘、6尺桶10本、小釜1つをはじめ34点が書上げられている。<sup>(20)</sup>しかし、そこでは十一屋仁兵衛がこれらの酒道具を預かったことになっているが、他家から質物として預かった可能性もあり、高井作右衛門家が実際に使用していた酒道具であるかは不明である。

高井家の年未詳「屋敷見取図」<sup>(21)</sup>によれば、店は間口8間で、入口付近には「売場」(板エン)、「見セ」(6畳)、「中ノ間」(7畳半)、「ミセノヲク」(6畳)、「中ノマ」(6畳)、「ヲクノマ」(8畳)、「勝手」(5畳)と「風呂バ」「土間」などが入口から入って左側に並び、右手には「味噌入所」「升売所」があり、事務および小売に対応する店先が存在した。中央部には左側に「土蔵」(2間半×6間)、「附屋 土蔵」(3間半×5間)、「むろ 土蔵」(2間×5間)の3つの蔵が並び、右手には「割木積入所」「フロ」がある。奥の部分には、中に「釜」2つと杜氏・蔵人が使用した「上広敷」「下広敷」をもつ「土蔵」(5間×7間)があり、さらにその奥に酒桶の貯蔵場所と思われる「酒蔵」(5間2尺×15間)があった。

高井作右衛門家が、どれだけ年々酒を造っていたのかを示す史料として「酒造年々造高」<sup>(22)</sup>があり、それを表2によって見てみよう。天保14年(1843)の酒造高は1177石2斗6升であり、江戸時代においてすでに1000石規模の酒造りを行っていたことがわかる。ただし、表の「米高値二付休造」によってもわかるように、米価の変動、酒造統制によって酒造高に変化が見られる。弘化2年(1845)や嘉永元年は休造しており、慶応2年(1866)～明治2年の休造や減造なども原材料である米価の高騰に基づく生産調整によるものであった。

高井作右衛門家は、藤岡地方の酒造家として活躍しており、34名の酒造家が「掟」に連印している享和3年9月の「名前帳」<sup>(23)</sup>の筆頭に十一屋作右衛門が

(20) 文政8年8月「酒造道具目録帳」。

(21) 年未詳「屋敷見取図」。この図面は、前掲『藤岡市史』通史編 近世 近代・現代、160～162頁にも掲載されている。

(22) 「酒造年々造高」(文政8年正月「記録之写(二)」)。

(23) 享和3年9月「名前帳」。同史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近世(750～752頁)にも掲載されているが、酒造家が2名欠けている。

表2 高井作右衛門家の酒造高

年 代	酒 造 高	備 考
天保14年 (1843)	1177 石 2 斗 6 升	
弘化元年 (1844)	1006 石 8 斗	
弘化 2 年 (1845)		米高値ニ付休造ス
弘化 3 年 (1846)	1054 石 9 斗	
弘化 4 年 (1847)	811 石 4 斗	
嘉永元年 (1848)		米高値ニ付休造
嘉永 2 年 (1849)		
嘉永 3 年 (1850)	400 石 2 斗	
嘉永 4 年 (1851)	819 石 1 斗	
嘉永 5 年 (1852)	807 石 5 斗	
嘉永 6 年 (1853)	831 石	
安政元年 (1854)	500 石	
安政 2 年 (1855)	717 石 9 斗	
安政 3 年 (1856)	376 石 6 斗 5 升	
安政 4 年 (1857)	376 石 6 斗 5 升	前々より写違哉
安政 5 年 (1858)	707 石 8 斗	
安政 6 年 (1859)	767 石 6 斗 9 升	
万延元年 (1860)	903 石 4 斗 9 升	
文久元年 (1861)	885 石 2 斗	
文久 2 年 (1862)	1005 石 5 斗	
文久 3 年 (1863)	1025 石 3 斗 5 升	
元治元年 (1864)	1206 石 9 斗 4 升	
慶応元年 (1865)	937 石 1 斗 6 升	
慶応 2 年 (1866)		米高値ニ付休造、仲間一統
慶応 3 年 (1867)		右同断、仲間内三分造り、当店皆休
明治元年 (1868)	273 石 8 斗 3 升	三分の一造り
明治 2 年 (1869)	188 石 9 斗	四分ノ一造
明治 3 年 (1870)	448 石 8 斗 5 升	
明治 4 年 (1871)	290 石 5 斗 9 升	
明治 5 年 (1872)	528 石 8 斗 9 升	
明治 6 年 (1873)	588 石 8 斗 5 升	
明治 7 年 (1874)	455 石 8 斗 5 升	
明治 8 年 (1875)	603 石 8 斗	
明治 9 年 (1876)	663 石 8 斗	
明治10年 (1877)	725 石 9 斗	
明治11年 (1878)	844 石 3 斗 5 升	
明治12年 (1879)	890 石 9 斗 8 升	
明治13年 (1880)	774 石	
明治14年 (1881)	787 石 2 斗	
明治15年 (1882)	688 石 8 斗	
明治16年 (1883)	435 石 4 斗	
明治17年 (1884)	684 石	
明治18年 (1885)	450 石 1 斗	
明治19年 (1886)	604 石 8 斗	
明治20年 (1887)	788 石 1 斗	
明治21年 (1888)	675 石	
明治22年 (1889)	705 石 1 斗	
明治23年 (1890)	780 石	
明治24年 (1891)	810 石	
明治25年 (1892)	810 石	
明治26年 (1893)	810 石	
明治27年 (1894)	876 石	
明治28年 (1895)	987 石 4 斗	
明治29年 (1896)	792 石	
明治30年 (1897)	924 石	
明治31年 (1898)	726 石	
明治32年 (1899)	858 石	
明治33年 (1900)	2080 石	
明治34年 (1901)	747 石 5 斗	
明治35年 (1902)	747 石 5 斗	
明治36年 (1903)	777 石 6 斗 7 升	
明治37年 (1904)	595 石 4 斗	
明治38年 (1905)	822 石	
明治39年 (1906)	853 石	
明治40年 (1907)	2047 石 5 斗	
明治41年 (1908)	746 石	
明治42年 (1909)	780 石	

(注)「酒造年々造高」(文政8年正月「記録之写(二)」(高井作右衛門家文書)より作成。



記されており、この時期には藤岡地方の酒造家の中でも、同家が中心的な存在であった。高井家は酒造業を営んでいたため酒造仲間に属し、文久4年(1864)には亀屋忠蔵と、明治3年には下野屋勇蔵と二人でともにその行司を務めており、酒造仲間の中でも中心的な酒造家であったと思われる。酒造仲間は、松尾講<sup>(24)</sup>という組織を結成しており、文化8年～慶応2年の松尾講に関する史料が高井家に残されており、そこには十一屋作右衛門の名前が見える。<sup>(25)</sup>

以上のように、高井作右衛門家は藤岡において主要な地位を占めていたことが想定されるのであるが、酒造家としてどれぐらいの位置にあったのか、他の酒造家と比較のために示したのが、表3である。ここには、酒造家だけでなく、濁酒や醤油醸造業者もあげられており、新太郎のように酒造と醤油を兼業している者、六兵衛事彦六と源七のように濁酒と醤油を兼業している者も見られる。酒造業者は20軒あげられており、造高は100～800石であった。その中でも作右衛門が800石の造高であり、この地方で最も大きな規模を誇っていた。身分としては、百姓以外に名主・組頭・百姓代も見られ、村役人層を含んだ資産家によって酒造業等が営まれていたようすがわかる。作右衛門も百姓身分であった。名前には、「～事」というように記されている場合が多く見られるが、これは出店などのため主人の代わりに支配人などが代理に記されているものであろう。高井家も「作右衛門事 作四郎」とあり、当主の作右衛門に代わり責任者である作四郎が任務に当たっていたものと思われる。酒造は100～800石の幅があったのに対し、濁酒は10～20石であり、規模が相当小さかったことがわかる。醤油は、50～200石であり、ある程度の規模が見られた。

このように、高井家は藤岡に店を構え、享保14年に酒造業を開始してきたとされているが、その後の状況は現在のところ不明である。寛政4年には150

---

(24) 万延元年9月「行司順番連名帳」。この史料には、万延元年から明治10年に至る毎年の行司が2名ずつ記されている。

(25) たとえば、文化6年8月「松尾講控帳」には、27人の名前とともに、十一屋作右衛門の名前が見え、同史料の裏表紙には、「梅鉢屋孫兵衛々十一屋作右衛門へ渡入」とある。同史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近世(1032～1034頁)にも掲載されている。

表3 慶応元年新町宿組合酒造濁酒醬油冥加上納帳

種類	株	造高	此三分一冥加	所 在	身分	名 前
酒造	御貸株	100 石	1 兩 2 分・永 166 文 7 分	上野国緑埜郡新町宿之内苗木新町	年寄	六左衛門事 嘉六郎
酒造	御貸株	150 石	2 兩 2 分	上野国緑埜郡新町宿之内落合新町	百姓代	惣兵衛事 惣平
酒造	御貸株	100 石	1 兩 2 分・永 166 文 7 分	同国同郡同宿之内同町	百姓	武兵衛事 武平
酒造	古株	800 石	13 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡藤岡町	百姓	作右衛門事 作四郎
酒造	古株	400 石	6 兩 2 分・永 166 分 7 分	同国同郡同町	百姓	新太郎
酒造	古株	300 石	5 兩	上野国緑埜郡藤岡町	年寄	甚右衛門事 甚太郎
酒造	古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡同町	百姓	新兵衛事 新太
酒造	古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡同町	百姓	平八
酒造	古株	300 石	5 兩	同国同郡神田町	名主	政右衛門事 金七
酒造	御貸株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	上野国緑埜郡神田村	百姓	彦左衛門事 彦六
酒造	古株	450 石	7 兩 2 分	武蔵国賀美郡藤木戸村	名主	武兵衛事 庄八
酒造	古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡同村	百姓	房次郎
酒造	古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	上野国緑埜郡本動堂村	百姓	勇藏
酒造	古株	150 石	2 兩 2 分	上野国緑埜郡上落合村	百姓	孫藏
酒造	古株	800 石	13 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡鬼石村	名主	源左衛門事 新太郎
酒造	古株	300 石	5 兩	同国同郡同村	組頭	千代之助事 千代作
酒造	古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡同村	百姓	権左衛門事 権平
酒造	古株	400 石	6 兩 2 分・永 166 分 7 分	上野国緑埜郡鬼石村	百姓	惣右衛門事 惣次郎
酒造	御貸株	100 石	1 兩 2 分・永 166 文 7 分	同国同郡立石新田	百姓代	瀬兵衛事 瀬平
酒造	元古株	200 石	3 兩 1 分・永 83 文 3 分	同国同郡中嶋村	名主	文右衛門事 文衛
濁酒造		20 石	1 兩	上野国緑埜郡新町宿之内落合新町		太助事 太吉
濁酒造		10 石	2 分	同町	百姓	国藏
濁酒造		10 石	2 分	上野国緑埜郡新町宿之内落合新町	百姓	清兵衛事 清市
濁酒造		10 石	2 分	同国同郡同宿之内苗木新町	年寄	六兵衛事 彦六
濁酒造		10 石	2 分	同国同郡白石村	百姓	兵松
濁酒造		10 石	2 分	同国同郡中島村	百姓	市左衛門事 市太郎
濁酒造		10 石	2 分	上野国緑埜郡藤岡町	年寄	源七
濁酒造		10 石	2 分	武蔵国賀美郡藤木戸村	組頭	重太郎
濁酒造		10 石	2 分	同国同郡鬼石村	百姓	忠藏
濁酒造		10 石	2 分	同国同郡藤岡町	年寄	三左衛門 太郎平
濁酒造		10 石	2 分	武蔵国賀美郡堤村	百姓	吉右衛門事 吉藏
醬油造		200 石	6 兩	上野国緑埜郡藤岡町	百姓	四郎左衛門事 又四郎
醬油造		100 石	3 兩	同国同郡同町	百姓	新太郎
醬油造		150 石	4 兩 2 分	上野国緑埜郡藤岡町	年寄	源七
醬油造		50 石	1 兩 2 分	同国同郡神田村	百姓	彦左衛門事 彦六
醬油造		50 石	1 兩 2 分	同国同郡上大塚村	組頭	健吉
醬油造		50 石	1 兩 2 分	同国同郡中島村	名主	文右衛門事 文衛
醬油造		100 石	3 兩	上野国緑埜郡鬼石町	百姓	金之助事 金平
醬油造		50 石	1 兩 2 分	同国同郡新町宿之内苗木新町	年寄	六兵衛事 彦六

(注) 慶応元年「酒造濁酒醬油御冥加上納帳」(高井作右衛門家文書)より作成。

石の酒造株を持っていたことが明らかになり、天保期以降になると、1000 石規模の酒造を行う藤岡地方ではトップクラスの酒造家として酒造仲間の行司なども務めるようになっていったことが、ここでは確認することができる。

そして、藤岡店で用いられる酒造業の原料米は、近隣諸藩の在払米を使用していたようである。高井家は高崎藩の掛屋である飯野家と密接な関係があり、天保2年12月の「覚」<sup>(26)</sup>では、掛屋の飯野善右衛門が領主払米3000 俵を引

当に 1200 両を鬼石宿の十一屋宗兵衛と藤岡宿の十一屋作右衛門から借りているのがわかる。なお、ここに見える鬼石の十一屋宗兵衛は、高井家と同じ日野商人の藤崎惣兵衛である。飯野家は天保 14 年には 7700 俵の払米を引き受けており、これらが高井作右衛門を含めた近隣の酒造業者などへ原料米として販売された。<sup>(27)</sup> こうしたことから高崎藩とも関係を深め、高崎藩発起の無尽講の寄金 4000 両の調達にも藤岡近在の有力商人の一人として関与したようであり、<sup>(28)</sup> 後述するように藤崎惣兵衛とともに高崎藩への貸付にも深くかかわっていった。

また、文政 12 年 12 月には正観寺村の年貢米が在払いされ、藤岡町の十一屋作右衛門家へ 76 俵が売却されており、<sup>(29)</sup> 万延元年（1860）の上郷下小鳥村の年貢米の売却先にも藤岡町の十一屋作右衛門の名前があげられ、そのうち 50 俵が売却されたようである。<sup>(30)</sup> このようにして、在払米を通して藤岡店の原料米調達がなされていった。

## 2 質屋業

高井作右衛門家は、前述したように酒造業だけでなく、元文 4 年には質屋も開業したとされている。その後の動向は不明であるが、無宿者より脇差を質に取ったいきさつについて釈明した文化 13 年 4 月の「乍恐以書付奉申上候」<sup>(31)</sup> において、「上州緑埜郡藤岡町年寄兵四郎店、質屋作右衛門在所江州住宅ニ付、代見世差配人と兵衛」とあり、藤岡町の年寄兵四郎の借家において作右衛門が質屋を営んでおり、差配人として与兵衛がいたことが明らかになる。

- 
- ✓ (26) 天保 2 年 12 月「覚」（高崎市史編さん委員会編『新編 高崎市史』資料編 6 近世Ⅱ，高崎市，197 頁）。
- (27) 天保 14 年 9 月「寅年御払米調帳」（前掲『新編 高崎市史』資料編 6 近世Ⅱ，200 ～ 202 頁）。
- (28) 高崎市史編さん委員会編『新編 高崎市史』通史編 3 近世（高崎市，2004 年）406 ～ 408 頁。
- (29) 同上，402 ～ 403 頁。
- (30) 同上，403 ～ 406 頁。
- (31) 文化 13 年 4 月「乍恐以書付奉申上候」。

また、年末詳4月の「覚」<sup>(32)</sup>で、過料銭3貫文を課せられた時にも、「上叅緑埜郡藤岡村年寄兵四郎店、質屋作右衛門江叅住居ニ付、店支配人常八」とあり、藤岡村の年寄兵四郎の借家において作右衛門が質屋を営んでおり、店支配人として常八がいたことがわかる。

質屋業については、天保9年頃の「覚」<sup>(33)</sup>によれば、「酒造拾歳後初る」「一質物金高九千八百両余銭五千六百〆余」とあり、高井家が藤岡で酒造業を始めた享保14年の10年後の元文4年に質屋業を始めたことが確認でき、天保9年頃の質高が9800両・5600貫目余で、相当大規模であったことがわかる。この「覚」には、ほかに「一家内之者式拾六人」「一店ちん金式拾五両」「一国本家内拾壱人」「一田地持高百式拾石余」とあり、藤岡店の人数が26人で、近江の本家にも11人がいること、店の家賃は年に25両であること、田地持高が120石余であることが明らかになる。

年末詳4月の「差上申一札之事」<sup>(34)</sup>によれば、支配人の与兵衛が「私儀、上州緑埜郡藤岡町年寄兵四郎店借請、数年来表間口六間裏行廿七軒、数年来借地ニ致し、壱ケ年ニ地代金五拾両ツ、差出し、家内四十人暮ニて、質并酒造渡世致候」と述べている。藤岡店は、年寄の兵四郎の店を借り請けて、質ならびに酒造の営業を続けており、その大きさは表間口6間×奥行27間であり、借地代として1年に50両を支払い、40人の者がそこで生活していたことがわかる。

高井作右衛門家が質屋業を廃止するのは、「一質屋営業、大正六年二月一日限り廃業す」<sup>(35)</sup>とあるように、大正6年2月であった。

---

(32) 戌4月23日「覚」。文化8年5月「願書」に、支配人として常八の名前があり、この史料もこの頃のものとすると、文化11年の可能性がある。

(33) 年末詳「覚」。この史料には、年代が書かれていないが、文中に「元文四年末年凡九拾八九年ニ相成」とあることから、天保9年頃と判断した。また、この史料には、「白米四拾九石四斗五升」「金百式拾両壱朱」「酒造高、三分式造、三百三拾石余」とあり、3分の2造りであるが330石余の酒を造っていたことがわかる。

(34) 子4月14日「差上申一札之事」。

(35) 文政8年正月「記録之写(二)」。そこでは、さらに「但し、度量衡販売八同日より雑品課の取扱となす」とある。

### 3 貸付業

高井作右衛門家は金融業や借家業も営んでおり、資金の貸付先としては領主・商人・農民などがあげられる。

領主宛としては、文化8年11月の「高崎御屋鋪并出金勘定之写」<sup>(36)</sup>によれば、高崎藩が借財1600両に対する5か年の返済猶予計画を御勝手方から鬼石の十一屋宗兵衛と藤岡の十一屋作右衛門に提示しており、高崎藩に対し相当の貸付をしていたことがわかる。また、天保4年11月には、板鼻宿の六左衛門から十一屋作右衛門宛の500両の借用証文<sup>(37)</sup>が残されている。そこには、「尾州様御役所江調達仕候内江借用仕候処実正ニ御座候、返済之儀者江州御領之内日野三ヶ村収納米之内、来午年々百貳拾六石宛御払代金ニ而年々相渡り」とあり、六左衛門を通じて尾張藩へ貸し付けられ、返済には江州日野の村々の年貢米が充てられたようである。そして、文久2年8月には高崎藩に対し、十一屋作右衛門と十一屋惣兵衛は連名で、「是迄数度御才覚奉差上置候金子都て六千貳百六拾両御証文、並ニ御引宛御米壹万六千貳百五拾俵御切手不殘取揃へ、今般奉献上度奉願上候」<sup>(38)</sup>というように、これまでの調達金6260両(引当米1万6250俵)を献上する旨の申し出を行った。また、明治4年12月に、上州緑埜郡藤岡町酒造渡世の十一屋屋作四郎代友七が、藩債を群馬県へ届け出た際にも、小幡氏に対する御用達金として1535両、700両、860両の証文を提示し、その御下ケ金<sup>(39)</sup>を願い出ている。

(36) 文化8年11月「高崎御屋鋪并出金勘定之写」。この史料では、寛政11年からの利金が計算されており、寛政11年の借財のようである。

(37) 天保4年11月「借用申金子之事」。嘉永4年4月「尾州表江調達金一条ニ付、野田御氏より本家へ請取置候約定書写」(前掲文政8年正月「高井家記録写(一)」)には、「先年貴殿と半乗合にて尾州御勘定へ調達仕候金千両口之儀、昨戌六月中御仕法ニ付、長年賦済之儀被仰出候」とあり、この時点で返済されず、野田氏との1000両の半乗合分の500両であったことがわかる。

(38) 文久2年8月「乍恐以書付奉願上候」(前掲文政8年正月「高井家記録写(一)」)。

(39) 明治4年12月「上」。

このような領主との関係から、藤岡町の領主であった水上織部から十一屋作右衛門に対し、文政8年12月には「藤岡町年寄格、苗字可相名乗」とあるように、年寄格と苗字が許されている<sup>(40)</sup>。さらに、高崎藩とも密接な関係をもち、寛政12年には領主である高城右京の家督祝いに扇子1箱を献上し、文政5年以降も入国の祝いや見舞などさまざまな出来事に際し、金子や鯛、扇子などの献上を行い、深い関係が継続して見られた。こうしたことから、高崎藩の藩士との関係も密接であったようで、年始の挨拶に合計29両1分・150文を御城代御勝手掛の宮部兵右衛門をはじめとした藩士30人以上に贈っている<sup>(41)</sup>。

次に、高井家による商人貸について見てみよう。天保13年の「年賦金内取調帳」<sup>(43)</sup>によれば、文政10年3月には武州騎西町の藤兵衛に100両、文政11年7月には本庄宿の権左衛門に600両、文政13年5月には本動堂村の小嶋藤兵衛に255両、天保4年正月には武州深谷宿の粉屋孫兵衛に70両を貸し付け、残額がまだ滞っている旨を記録している<sup>(44)</sup>。天保3年6月の「証文貸金写」には、この時点で返済されていない借入金を書き上げられており、それを示したのが表4である。この表によれば、29件の借用金額があげられており、文政9年以降の借用分であった。1件当たりの借用金額は1～150両であり、借主は本庄宿、牧西村の者が多く、藤岡周辺地域の者であった。名主も多く見え、屋号のある商人がその対象であったことがわかる。

---

(40) 前掲文政8年正月「記録之写(二)」。前掲『藤岡町史』では、文化8年12月28日の史料において、「水上織部内 多田半十郎」より十一屋作右衛門に対し、「藤岡町年寄格、苗字可相名乗、右者年来勝手向出精相勤候に付被仰付」とあるように、藤岡町年寄格と苗字が許されている(340頁)。

(41) 前掲文政8年正月「記録之写(二)」。

(42) 年末詳「高崎藩士年始挨拶贈金」前掲『藤岡町史』資料編 近世、88～89頁。

(43) 天保13年「年賦金内取調帳」。

(44) 天保14年5月「奉願上候貸滞金銘々名前之事」によれば、武州榛沢郡深谷宿の粉屋孫兵衛(70両)は穀物渡世、武州児玉郡本庄宿の権左衛門(150両)は古着質屋渡世元手金、上州緑埜郡本動堂村の藤兵衛(255両)は質屋并酒造渡世元手金、上州佐位郡伊勢崎の佐右衛門(200両)は水油店方融通、上州群馬郡高崎寄合町の重右衛門(81両)は商売仕入金に差し詰まり、高井作右衛門家から貸付を受け、訴訟の対象となっている。

表 4 高井家証文貸金

年 代	金 額	所 在	名 前
天保 3 年 (1832) 6 月 6 日	30 両	本庄宿	名主 森田助左衛門
文政13年 (1830) 閏 3 月 8 日	10 両	本庄宿	紅葉屋孫兵衛
天保 4 年 (1833) 3 月 6 日	50 両	本庄宿	酒屋三左衛門
天保 5 年 (1834) 10 月 15 日	18 両		近江屋正蔵
天保 3 年 (1832) 10 月朔日	40 両		日野屋武兵衛
天保 4 年 (1833) 正月 17 日	70 両		粉屋孫兵衛
文政14年 (1831) 10 月 9 日	50 両		十一屋幸右衛門
天保 3 年 (1832) 12 月 22 日	150 両	本庄宿	松屋小七
同	50 両		右同人
同	50 両		右同人
天保 3 年 (1832) 12 月 15 日	20 両		右同人
文政 9 年 (1826) 12 月 25 日	10 両		松屋庄蔵口 栄蔵
文政11年 (1828) 9 月 3 日	50 両		松屋庄蔵口 竹長分
文政13年 (1830) 閏 3 月 8 日	50 両		松屋庄蔵口 右同人
文政12年 (1829) 12 月	30 両		松屋庄蔵口 茂松屋常八
文政11年 (1828) 11 月 17 日	10 両	本庄宿	竹屋常次郎
文政11年 (1828) 11 月 25 日	5 両	江州愛知川在	近江屋甚兵衛
天保 3 年 (1832) 12 月 24 日	15 両	榛名郡東方村	藤助
文政11年 (1828) 11 月	61 両 2 分 2 朱・381 文	熊谷宿	代屋三左衛門
天保 3 年 (1832) 10 月 1 日	9 両	児玉郡元仁手村	名主 保太夫
天保 3 年 (1832) 閏 11 月 2 日	10 両	牧西村	名主 利四郎
天保 3 年 (1832) 12 月 12 日	15 両	牧西村	名主 彦右衛門
天保元年 (1830) 12 月 30 日	2 両	同村	和助
天保 2 年 (1831) 11 月 3 日	2 両		大黒屋正兵衛
文政 9 年 (1826) 3 月	5 両	牧西村	万屋安兵衛
文政 9 年 (1826) 12 月 24 日	2 両	牧西村	名主 彦右衛門
文政 9 年 (1826) 12 月 28 日	1 両	同村	名主 利四郎
文政12年 (1829) 9 月 25 日	2 両	同	大家和助
文政13年 (1830) 7 月 11 日	2 両	牧西村	東屋正右衛門

(注) 天保 3 年 6 月「証文貸金写」(高井作右衛門家文書)より作成。

高井家は酒造業を営んでいたため、酒造関係の商人への貸付も多く、次のような貸付が見られた。享和 3 年 8 月には、高崎連雀町の清兵衛が土蔵 3 か所、酒道具等を引当に、80 両を借り、返済できずに藤岡町の十一屋作右衛門に譲り渡している<sup>(45)</sup>。ただ、この建物諸道具は、享和 3 年 8 月から 12 年季で、1 か年に 8 両の家賃料で清兵衛へそのまま貸し付けられた。文政 5 年 11 月には、<sup>(46)</sup>

(45) 享和 3 年 8 月「譲渡申一札之事」。その時の「目録」が残されており、そこには酒蔵(梁間 4 間、桁行 6 間) 1 か所、穀蔵(梁間 2 間、桁行 4 間) 1 か所、文庫蔵(梁間 9 尺、桁行 2 間半) 1 か所、釜大小 2 つ、6 尺桶 7 本、4 尺桶 10 本、船 1 艘、半台 48 枚、小敷大小 2 つ、焼酎釜小敷、つぼ台 4 本、他に小道具類が書き上げられている。



前述した本動堂村の藤兵衛が100両を借用し、その引当に酒造蔵諸道具酒株を当てている。すなわち、その内容は、酒造元株25石、酒造蔵、桶5尺5寸10本、半切50枚、桶4尺5寸8本、桶4尺8本、坪台6本、其外小道具であった。<sup>(47)</sup> 嘉永3年9月には、飯野庄之助が200両の借用の引当に、屋敷（間口4間、奥行30間）、酒造蔵（間口4間、奥行13間、諸道具）、建家（間口3間半、奥行8間）、穀蔵（間口2間、奥行3間）を当てている。

こうした酒造業者だけでなく、さまざまな商人に対し貸付を行っていたようであり、弘化3年12月の「約定一札之事」によれば、高橋屋勘兵衛には「年来御入魂ニ致候ニ付」として、1950両もの商用元手金を貸し付けているのがわかる。さらに、安政2年（1855）9月の「乍恐以書付奉歎願候」<sup>(48)</sup>では、天保4年7月に御城中紺屋町の中島屋藤四郎が渡世向の元手金が差支えたので、家屋敷を売渡して金子を調えようとした。高井家では代金250両でそれを買い取り、そのまま藤四郎に居住させ家賃として1年に25両ずつもらう約束をした。天保14年閏9月には、作右衛門が「上州緑野郡藤岡町江出店仕、支配人附置酒造、質物渡世罷在候処」、上野国甘楽郡宮崎村の百姓「重右衛門義も醬油并絹商売いたし」、本家の「呉服、太もの并質物等渡世」している重兵衛も世話をしてくれ、両者とも高井家と懇意にしていたので、天保2年に重右衛門へ300両を貸し付けた。天保6年までは返済が見られたが、それ以降の残金135両は返済されていないので役所へ訴え出た史料が残されており、こうした商人への貸付も盛んに行われていた。

また、十一屋作右衛門から著名な近江商人である松居久左衛門宛の文政10年11月と同11年11月の500両と2000両の預かり証文と<sup>(50)</sup>、同10年閏6月17

✓ (46) 享和3年8月「店借請候一札之事」。

(47) 文政5年11月「借用申金子之事」。

(48) 安政2年9月の「乍恐以書付奉歎願候」。この約束も弘化3年になり、身上不如意となり、45両の減額に应じることとなっている。

(49) 天保14年閏9月「乍恐書付奉願上候」（前掲『群馬県史』資料編9 650～651頁）。

(50) 文政10年11月「預り申金子之事」、同11年11月「預り申金子之事」。

(51) 文政10年閏6月「為替金借用手形之事」。



日の「為替金借用手形之事」<sup>(51)</sup>として300両の十一屋作右衛門から松居久左衛門宛の受取があり、近江商人間で為替などを含めた資金の融通が行われていたことがうかがえる。

さらに、領民に対しても貸付を行っており、嘉永元年10月の「一札之事」<sup>(52)</sup>によれば、年貢上納に差し支えたので、山崎檀中惣代と芦田町檀中惣代とが、釣鐘を質に入れようとまでして、貸付を願っている切実な様子もうかがえる。さらに、慶応4年3月の「差出し申対談一札之事」<sup>(53)</sup>では、作右衛門を筆頭に四郎左衛門・甚右衛門・源七・作兵衛・勝右衛門の質屋6軒が、近郷22か村に対する1100両の融通について、村々の寺院方を通じて依頼を受け、これを承諾している。

高井家は金銭の貸付だけでなく、借家も所有していたようで、嘉永7年4月の「借家証文之事」<sup>(54)</sup>によれば、十一屋作右衛門所持の「高崎新紺屋西側、表間口三間、奥行拾五間壱尺五寸并ニ座敷壱ケ所、雪隠式ケ所付」を忠兵衛に貸し付けており、家賃は1年に4両であった。

## 4 雇 用

高井家に現存する最も古い史料は、雇用に関する元文4年8月の「請状之事」<sup>(55)</sup>である。

### 請状之事

一此藤八と申者慥成者ニ御座候ニ付、私共人主請人ニ立、当未ノ八月分子ノ八月迄中五年季ニ相定、給金之義者壱ケ年ニ文金壱両、夏単物冬ぬのこ壱つつゝニて、貴殿店江御奉公ニ相極メ、右給金之内文式分御借被下慥ニ請取申候、宗旨之義ハ代々西本願寺村円入寺旦那紛無御座候間、則

(52) 嘉永元年10月「一札之事」。現実には釣鐘の質入れは断り、貸付がなされたようである。

(53) 慶応4年3月「差出し申対談一札之事」。

(54) 嘉永7年4月「借家証文之事」。

(55) 元文4年8月の「請状之事」。この史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近世922頁にも掲載されている。

寺請狀請人方江取置申候、此者取逃欠落仕候者、請人罷出貴殿江少茂御  
難義掛申間敷候、為後日請狀仍如件

元文四年未八月

猫田村

人主 兵右衛門<sup>㊦</sup>

請人 重兵衛<sup>㊦</sup>

松尾山村

作右衛門殿

すなわち、近江国蒲生郡猫田村の藤八を元文4年から5年季で雇用し、給金は年1両であった。なお、給金のうち2分を前借りしている。文言に「貴殿店江御奉公」とあり、作右衛門家の店での雇用であった。遅くともこの時期には、すでに店舗を構えて事業を行っていたことが確認される。

奉公人請狀は、これ以外にも3点ある。寛政3年9月の「奉公人手形之事」<sup>(56)</sup>は、小林村<sup>(57)</sup>の源蔵の請狀であり、給金は1年に3両で、藤岡町の十一屋作右衛門宛となっている。寛政12年4月の「奉公人請狀之事」<sup>(58)</sup>も、小林村の忠次の請狀で、奉公期間は10か年季であり、給金は「御店奉公人並ニ可被下候」というもので、十一屋作右衛門宛であった。文言には「御店御作法何事不寄為相背申間敷候」とあり、藤岡店での奉公を対象としたものであった。文政9年4月の「奉公人請狀之事」<sup>(59)</sup>は、庄右衛門の請狀で、奉公期間は5か年季であり、給金は1か年に7両であった。また、同家には「奉公人請狀之事」<sup>(60)</sup>の雛型も残されている。その雛形は寛政12年の請狀の形式を踏襲しており、同家には恒常的に奉公人が多数雇用されていたことがわかる。

(56) 寛政3年9月「奉公人手形之事」。この史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近世 923～924頁にも掲載されている。

(57) 小林村という記述だけでは判断できないが、藤岡町の近隣にある上野国緑野郡小林村の可能性が高い。そうすると、近江出身者だけでなく、近在からの奉公人も抱えていたことがわかる。

(58) 寛政12年4月「奉公人請狀之事」。

(59) 文政9年4月「奉公人請狀之事」。

(60) 年末詳「奉公人請狀之事」。

さらに、天明4年(1748)10月の「証文」<sup>(61)</sup>によれば、近江国蒲生郡中在寺村の伝六という奉公人が引負を働いたものの、藤岡で勤務していた時の着替えを返却してもらい、「上弐藤岡五里四方、猶又是迄御取引被成候間屋方御商先江遠慮可致候」とした上で、「何方江成共参相拝候様被仰下」とあるように、藤岡周辺以外での稼ぎが認められたようである。以上の奉公人関係の史料からも、高井家が藤岡の店において、近江出身者の奉公人を雇用していたことがわかる。

藤岡店には、文化4年8月の「身分定事」<sup>(62)</sup>が残されており、そこには次のような奉公人が守らなければならないことがらが決められていた。

#### 身分定事

- 一糸絹類身ニ付不申候
- 一碁将棋致間敷候
- 一他行日の内ニ歸り可申候
- 一用事之外近所江出不申候
- 一学文致申間敷候
- 一連歌俳諧致間敷候
- 一酒宴遊興致間敷候
- 一手道具百文迄品用可申候
- 一脇差式分下直之品用可申候
- 一洗度はり替物の外着用不申候
- 一朝ハ日之出迄私用相叶可申候
- 一夜者五ツ時ふせり可申候
- 一商売方出精可致事
- 一本店暑寒見舞相勤可申候

右之通相定候上者、何事ニ不寄身分之儀ニ付、脇々不埒之沙汰請申間敷候、

✓ (61) 天明4年10月「証文」。この史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近世923頁にも掲載されている。

(62) 文化4年8月の「身分定事」。この史料は、群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編9 近世1, 638～639頁にも掲載されている。

何様ニ相定候上者、皆々様宜御頼まいらせ候、為後日一書差上申候、如件

文化四年丁卯八月

十一屋長兵衛

十一屋勘蔵様

同 専助様

すなわち、14 か条からなるが、第1に華美に流れず質素儉約をすることとして、絹物や100文以上の手道具、2分以上の脇差、洗濯したもの以外を身につけないこと、碁・将棋や学問・連歌・俳諧・酒宴・遊興をしないことなどをあげている。第2に規則正しい生活をする事として、日のある内にかえること、用事以外で近所へ出かけないこと、私用は日の出までに済ませること、夜は5つ時に床に入ることなどを掲げる。第3に営業上の忠誠心として、商売に励み、本店への見舞は欠かさないことなどを奉公人に求めている。

## 5 事業内容と利益構成

ここでは、弘化3年の「勘定帳」<sup>(63)</sup>によって、弘化3年～慶応3年の高井作右衛門家の事業経営のどこからどれだけ毎年利益を獲得していたのか、利益の源泉について考えてみよう。それを表にしたのが、表5である。利益の勘定項目としては、第1に「証文利足」「証文金之分」「証文之分」などと記された貸付金の利足収入である「証文」、第2に「質物之分」「質方年中」「質方受取」などと記載された質方の収入である「質方」、第3に「酒方受取」「酒方両度分」「酒方利足」などと記された酒造による収入である「酒方」の3つの利益源泉が示され、それを合計した「惣ヅ」「差引」「二口合」などと記された合計部分からなっている。ただし、嘉永5年までの酒方の利益はここには計上されておらず、その合計も「証文」と「質方」の「二口合」「式口合、ヅ」「ヅ、歳中式口合」となっている。もちろん、前述した表2に見られるように、休造の年はあったものの、酒造業は営まれていたが、何らかの理由によりこの史料には記載されて

(63) 弘化3年「勘定帳」。この史料の表紙は、摩損が激しく正確に表題が判読できなかったが、内容からとりあえず「勘定帳」とした。

表 5 高井作右衛門家藤岡店の利益構成 (1)

年 代	証 文	質 方	酒 方	〆
弘化 3 年 (1846)	712 両 1 分 2 朱・8 貫 572 文	164 両・2 分 2 朱・1843 貫 875 文		1161 両 3 分 2 朱・765 文
弘化 4 年 (1847)	673 両 3 分・10 貫 248 文	167 両 2 分・1941 貫 949 文		1141 両 2 分・573 文
嘉永元年 (1848)	702 両 2 分・17 貫 612 文	202 両 3 分 2 朱・2039 貫 421 文		1221 両 3 分・593 文
嘉永 2 年 (1849)	780 両 1 分・15 貫 922 文	334 両 2 分 2 朱・2170 貫 492 文		1456 両 2 分・18 文
嘉永 3 年 (1850)	702 両 3 分 2 朱・15 貫 150 文	303 両 2 分・2249 貫 4 文		1365 両 3 分・82 文
嘉永 4 年 (1851)	830 両 1 分・12 貫 920 文	234 両 2 朱・2244 貫 313 文		1428 両 1 分 2 朱・433 文
嘉永 5 年 (1852)	718 両 3 分・21 貫 787 文	292 両・2195 貫 47 文		1368 両 1 分・338 文
嘉永 6 年 (1853)	393 両 3 分 3 朱・7 貫 548 文	440 両 2 分・730 文	70 両 2 分 3 朱・10 文	905 両 1 分・300 文
安政元年 (1854)	788 両 2 分 3 朱・12 貫 396 文	335 両 1 分・725 文	113 両 3 朱・1 貫 148 文	1239 両 1 分・457 文
安政 2 年 (1855)	755 両・579 文	244 両 2 分	69 両 3 分・756 文	1069 両 1 分・1 貫 339 文
安政 3 年 (1856)	784 両 3 分 1 朱	252 両 1 分 2 朱	67 両 2 分	1104 両 2 分 3 朱・320 文
安政 4 年 (1857)	856 両 1 分・18 文	261 両 3 分 2 朱	128 両 2 分・550 文	1246 両 2 分 2 朱・566 文
安政 5 年 (1858)	988 両・86 文	260 両 2 分 2 朱	115 両 2 朱・272 文	1363 両 3 分・362 文
安政 6 年 (1859)	897 両 1 分・223 文	261 両 2 分 2 朱・680 文	135 両 1 分・552 文	1294 両 1 分・647 文
万延元年 (1860)	1126 両 2 分 2 朱・233 文	310 両 2 分	78 両 2 朱・268 文	1515 両 1 分・505 文
文久元年 (1861)	774 両 1 分 2 朱・288 文	279 両 3 分	51 両 2 朱・268 文	1105 両 1 分・560 文
文久 2 年 (1862)	890 両 2 分 2 朱・707 文	257 両 2 分	33 両 1 分 2 朱・866 文	1181 両 2 分 2 朱・749 文
文久 3 年 (1863)	939 両 1 分 2 朱・553 文	219 両 2 分 2 朱	21 両	1180 両・553 文
元治元年 (1864)	929 両 2 朱・329 文	423 両	115 両	1467 両 2 朱・329 文
慶応元年 (1865)	1138 両 1 朱・175 文	532 両 2 分 2 朱	143 両 2 分	1812 両 3 朱・175 文
慶応 2 年 (1866)	807 両 3 分 2 朱・2 貫 769 文	760 両 2 分	208 両 3 分 2 朱・272 文	1777 両 1 分・3 貫 45 文
慶応 3 年 (1867)	856 両 2 分 3 朱・1 貫 816 文	861 両 2 分 2 朱・356 文	7 両 3 分 2 朱・280 文	1726 両 3 朱・2 貫 456 文

(注) 弘化 3 年「勘定帳」(高井作右衛門家文書)より作成。

いない。しかしながら、嘉永 6 年以降の数値は見られるので、それ以前の状況もある程度は推察できよう。

「証文」は、嘉永 6 年は 393 両余でやや少なく、万延元年と慶応元年は 1000 両を超えている。平均的には 700 ～ 900 両であり、幕末になるにしたがいやや増加する傾向にある。「質方」は、嘉永 5 年以前は金勘定ではやや少なく見えるが、銭勘定ではかえって多く、合計欄から逆算しても、500 両を軽く超えることになり、少ない年で 200 両以上、多い年では慶応 3 年のように 900 両近くにまで達する。「酒方」は、米価の影響や酒造統制などによって、もともと大きく変動する。ここに掲げられている範囲でも、慶応 3 年の 7 両余から同 2 年の 208 両余がある。平均すれば 50 ～ 100 両の利益を得ている。嘉永 5 年以前も記載がないが、たぶんこの程度の利益をあげていたものと思われる。合計では、嘉永 6 年の 905 両余から慶応元年の 1812 両余まであり、慶応期には物価上昇もあり大きく増加するものの、ほぼ 1000 両～ 1200 両の安定した利益をあげていることがわかる。

これら「証文」「質方」「酒方」の3部門を比較すると、「証文」が大きな位置を占め、最低でも半分以上、多い年は7割以上、平均でも6割以上のウエイトを占めていることがわかる。それらは、前述したように領主に対する貸付や商人に対する貸付が主になっていたものと思われる。それに比べ、高井家の主要事業と考えられていた酒造業から得られる利益額は意外と少なく、多くて1割余、少ない年は数%のウエイトしか占めておらず、ほとんどの年は1割未満であった。「質方」は、多い年では4割前後、少ない年では2割弱のウエイトを占め、平均すれば2割前後であり、「酒方」の2～4倍以上の安定した利益をあげていた。

要するに、この表に見られる利益構成からすれば、高井作右衛門家のこの時期の利益の源泉は、古くから開業した事業であり、家業とされる酒造業や質屋業ではなく、貸付業にあったことがわかる。また、酒造業も利益をあげているものの、変動が大きく、むしろ質屋業の方がその倍以上の利益をあげ安定しており、高井作右衛門家全体の利益の源泉からすれば、意外とウエイトが低かった。したがって、酒造業の資産としての価値は別として、高井家がこの時期に大きく発展を遂げていった原動力は、酒造業や質屋業にはなく、貸付業に基づくものであったといえる。しかし、酒造業は利益が他に比べ相対的に低かったとはいえ、家業として継続して着実な発展をはかったことが、近代以降の高井家の発展にもつながったし、質屋業の安定した利益構造もその礎となって、高井家の資本蓄積に貢献したのであった。

## 6 災害と施行

ここで、高井家を巡る災害等について触れておこう。当時の災害は、地震、風水害、火災であったが、とりわけ頻繁に発生し、その被害が大きかったのが火災である。北関東は強い季節風が吹き、木造屋敷の集住している藤岡町では、火の回りが早く、何度も大火に見舞われた。

「藤岡大火之記」<sup>(64)</sup>によれば、明和8年5月27日の大火では「此之時、当店焼失」

とあるように、高井作右衛門家の藤岡店が焼失した。さらに、寛政6年11月20日の火災では藤倉六左衛門の家が火元となったが、幸い「当店無難」と被害はなかった。文化11年12月25日の大火も店に被害はなかった。文政元年12月29日には清水庄兵衛家が、明治3年12月23日には梶屋清吉が、同10年1月1日には広瀬屋治兵衛家がそれぞれ火元となったが、いずれも高井家の店は難を逃れた。火災は冬場に集中して発生し、火元には商家がなり、高井家も巻き込まれる場合もあった。もちろん、こうした火災に対しては、「類焼ニ付、当店より差送り候品々」として、御飯・沢庵・味噌などの食料はもちろんのこと、水溜・傘・箒・蠟燭などの生活用品や材木・もっこ・人足などの復旧支援品などの提供を行った。

高井家は、こうした火災だけでなく、藤岡町の有力商人として、さまざまな困窮民に対し、救済の手を指し伸べている。天保4年の飢饉では、藤岡町の住民より大店の施行がなければ打潰すという貼紙があった。十一屋へも施行の申し入れがあり、藤岡町内の1079軒に対し総額243両3分の金銭と白米が施行された。また、天保7年にも藤岡町では米価高騰による打ちこわしなどの不穏な動きが見られるようになり、十一屋も施行を行うこととした。<sup>(65)</sup>

さらに、慶応2年6月に起こった徒党打壊しによって被害を受けた商人や関係者に対し、「当店焚出」として、生酒7樽、直酒3樽、焼酎1樽、白米7駄、味噌、油明2樽、沢庵500本、わらじ400足、梅干入升などを提供した。<sup>(66)</sup> 慶応3年6月には、「近来米価高値ニ付、難渋之者共多分之白米を施遣段、奇特之儀ニ付為御褒美銀五枚被下之」とあり、米価が高騰したため困窮の者に白米を施行し、その行為に対し作右衛門が褒美銀を受け取ったのである。<sup>(67)</sup>

こうした出店である藤岡を中心とした社会貢献は、近江商人である高井作右衛門家が他国稼ぎ商人であったことに起因し、商圈を他国にもつ近江商人の経

✓ (64) 前掲文政8年正月「記録之写(二)」。

(65) 前掲『藤岡市史』通史編 近世 近代・現代、206～207頁。

(66) 前掲文政8年正月「高井家記録写(一)」。

(67) 同上。

営行動の特性として、重視されなければならない側面であった。